甲戌の冬舟中に月を見て感有り

中江藤樹

念慮に一毫も差えば　酬応は千里も訛る

人心は宜しく静を主とすべし　明月は波に沈まず

【作　者】中江藤樹（一六〇八～一六四八年）（慶長十三年～慶安元年）・近江（滋賀県）の人。名は原。字は惟命（コレナガ）。藤樹と号す。江戸初期の儒学者。幼児より学問を好み、近江聖人と言われる。藤樹の号は藤の大樹の下で学問を講じたことから。

【語　釈】＊甲戌…キノエ、イヌの年。　＊念慮…考え、おもんばかり。　＊一毫…一本の毛筋。　＊酬応…応答、反応

【通　釈】ものの考え方は毛筋一本程の食い違いでもあると、そのくい違いに対する現実の結果は本来のものとは、千里もかけ離れたものとなってしまう。したがって人は心を静かに落ち着かせて、物事を正しく考察することを第一にする通い。丁度名月が波に沈まないように名月になった様に、名月のようなこころは、世のさまざまなわずらわしさに飲みこまれることはないのである。

【参　考】起承において「思慮が外れると、それは大変な誤りになる」ことを述べ転結において「名月にたとえ名月は良知良心に、波すなわち外部からの誘惑や、乱れにも決して沈まない」と述べている。